

書評03

佐藤 幹夫 著

『ルポ高齢者ケア ～都市の戦略、地方の再生』

筑摩書房／2014 年 5 月刊／254 ページ／800 円＋税
ISBN 978-4-4800-6777-7

評者：福澤 萌

北海道大学大学院農学院共生基盤学専攻



内閣府（2013 年度）によると日本人の約 4 人に 1 人は 65 歳以上の高齢者だという。社会保障費の増大、介護者への虐待、孤独死等のニュースを耳にするたび、「自分が自分らしく生きられないかもしれない」と強く思う。そして残念ながら現状の社会では、第 2 の人生を自分が思い描いていた通りには過ごせない。では何が課題で、その課題にどう立ち向かうべきなのか。本書はこの問いに向き合った本である。

本書は第 1 部（第 1～3 章）が「都市の戦略」、第 2 部（第 4～6 章）が「地方の再生」と 2 部構成となっている。第 1 部の都市の課題として「在宅医療の不足」「高齢者の孤独死」「ホームレスの高齢化」の 3 点を中心に、第 2 部の農村では、「中心市への医療の集中」「震災によるふるさととの破壊」との 2 点を中心に地域で高齢者をどう支え合うのかについて先進事例を踏まえて書かれている。

都市部での超高齢社会で見られる現象は、人口密集地での高齢夫婦や単身者の増大である。そこには在宅医療を受けたくても受けられずに病院で亡くなる方、人とのつながりを持たず（持てず）に孤立しながら生活し、孤独死する方がいる。

そこで第 1 章では 8 割近くを高齢者世帯に持つ千葉県柏市豊四季台地域の「柏プロジェクト」をあげている。ここでは在宅医療確立のための医者と介護者へのサポート体勢づくりと高齢者が健康に生きる仕組みづくりが挙げられて

いる。主治医と副主治医の複数人の連携により医者一人の負担を減らす方法や復職支援として看護師を採用している取り組みは、在宅医療を普及させる一助となる。

次に第 2 章では、東京都の中でも単身高齢者世帯が多い新宿区に焦点をあて、孤独死防止に力を注いでいる。「重層的見守り体勢」と称し、月 2 回発行される「ぬくもりだより」を配布しながら安否確認する仕組みや、郵便局や食事サービス配送業等の協力から日常業務の中でさりげなく高齢者を見守る体勢を作っている。どちらの事例もその地域の現状を分析し、その現状からどのような生活を実現しようとしているのか（目的）が明確である。だからこそ各地域主体（役所、大学、医療等）が連携し始めているのではないだろうか。

シルバー人材センターを利用した「定年後も働きたい」という声をサポートする取り組みも同時に考案されている。週に 2 回程度しか働けない場合も、他の人とローテーションすることで、働くことを実現できる。働くことで生きがいを感じることもでき一石二鳥である。私もどの世代も関係なく、働きたい人が生きがいをもって働くことには大賛成である。しかしこれが非正規雇用を賛成するものであってはならない。雇用関係を持つ以上その人の人生を預かっていることを忘れてはいけないと思う。

人件費は多大なるコストがかかるため会社経営にとっては、最低賃金で人手を必要とする時

期のみ雇用する非正規雇用は好都合である。非正規雇用の増大が招いた課題も次の章で掘り下げて述べられている。それがもう一つの都市部の課題、ホームレスの高齢化（高齢弱者）である。路上生活が気楽で好きだからホームレスになっているのならば自己責任だとも言えるが、そうではなく短期の非正規雇用として過酷な仕事を続け、その後使い捨てられ、生活保護受給を受けず、福祉や医療の世話になることも拒否してきた方たちである。この方たちを見守る取り組みを第3章ではあげている。ホームレス支援の森川氏によるとホームレスの4～6割は何らかの精神的および知的な障がいを持っているそうだ。「障がい者支援、ホームレス支援、介護保険といった、これまでのような枠組みの明瞭な“枠の支援”とは別の発想に立つ支援の提供が、行政や支援者の側に今必要になっている」（92頁）のではないだろうか。

次に農村の課題はどのようになっているのだろうか。第4章の熊本県山鹿市は全国平均より7年も早く高齢化が進んでいる地域であり、課題は医療的サポートの低さであった。「熊本モデル」は基幹型病院と地域拠点型病院という2層モデルを構築し、これらとかかりつけ医との連携強化を行っている。患者の症例に最初に気づくのは、かかりつけ医であるからこそ、彼らをサポートすることで高齢者の医療的サポートを向上させる取り組みである。

群馬県上野村（第5章）は約半数が高齢者であり、県内で最も人口が少ない（1,370名）過疎地域の農村である。一人暮らしや老夫婦世帯が多いこの地域の取り組みは、へき地診療所や介護福祉施設等と併設した高齢者集合住宅（高齢者福祉センター）により、保健・医療・福祉の一体化が進んでいることである。高齢者集合住宅があることで農村に居られる期間をギリギリまで長くすることが出来るし、また近所の人たちとの絆が強いからこそ普段の会話がそのまま「地域包括連携」になっている。

最後に第6章は石巻の記録として東北大震災が起きてからこれまでの記録と現状を綴っている。震災により土地と人とのつながりが根こそぎにされ、見知らぬ人ばかりの中で新しい人間関係を高齢になって根付かせることに課題がある。また震災後、石巻日本赤十字の尽力により震災前の医療水準に戻り、現在は在宅医療への追い風もある。前線の看護師や保健師と後方支援の医療とが連携しながら生活の総合的な支援を目指そうとしている。

ここまでざっくりとであるが各地域の課題とその解決策を整理してきた。これらの課題を見て私が感じたことは、その地域の魅力も一緒に見出しているのではないかと、という気持ちである。よく短所は長所だというのが、その課題を通してその地域の可能性も一緒に見えてきたように思う。都市では人口が集中しているからこそ専門性が高い人たちの集まりがあり、その連携には可能性が秘められている。過疎地域の農村では、地域のつながりでお互いを支え合う仕組みがあるし、幅広く地域のことを見ることが出来る。現状を分析してその地域の「強み」を見出していくことが必要なのではないだろうか。20年後を作り出すのはまさに今この瞬間であり、その現在に対して投げやりな状態では、未来が良くなるわけがない。そしてそのためには自分の専門性を他の分野へと広げていく能力が必要不可欠ではないだろうか。

本書は、ずっと肩に力が入りながら深刻に読み進めるものではなく、一種の楽天性を兼ね備えた本となっており、入門書としておすすめである。だからこそ「孤独死」「過疎地域」「高齢弱者」という負のイメージを持ちやすいこの課題に対して、各地域の戦略性（創造性）を考えられる一冊といえる。この本を通じて、超高齢社会を「自分ごと」として前向きに考える読者が増えることを願う。